

氏 名 白福英

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第279号

学位授与の日付 2023年9月28日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究
——モンゴル民族との関係の視点から

論文審査委員 主 査 卯田 宗平
人類文化研究コース 教授
韓 敏
人類文化研究コース 教授
池谷 和信
人類文化研究コース 教授
尾崎 孝宏
鹿児島大学 法文教育学域 法文学系 教授
児玉 香菜子
千葉大学 人文科学研究院 准教授

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 白福英

論文題目 中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究

—モンゴル民族との関係の視点から

本論文の目的は、主に中華人民共和国成立後の時期に、自然災害と大躍進による飢饉によって内モンゴル自治区のオラド後旗に移住してきた漢民族の牧畜活動の実態を民族誌的に描き出すとともに、彼らが牧畜に従事することによって生じたモンゴル民族との共存・共生関係を明らかにすることである。

本論文は、序論、結論を含めて6章からなる。第1章に当たる序論では、牧畜をめぐる研究について、その定義、家畜管理技術、牧畜形態、土地へのアクセスの在り方などの4つの観点から検証し、これらのテーマに照らし合わせ、牧畜社会一般における内モンゴルの牧畜の位置づけが定牧にあたることを指摘した。そして文化人類学的視点から内モンゴルに関する研究の蓄積を展望し、遊牧に重点を置く牧畜研究と漢化に重点を置くモンゴル民族の農耕化に関する研究という2つの傾向があることを指摘し、本論文で扱う漢民族の牧畜活動は既存の枠では捉えきれないことを浮き彫りにした。その上で、内モンゴル牧畜社会の多様性を漢民族の牧畜に関する分析を通して捉えることを、本論文の視座とした。本論文の研究対象に関する先行研究では漢民族の牧畜の状況への言及に留まり、その実態が十分に解明されているとは言い難い。また、漢民族が牧畜に転じたことによって形成された民族間関係も検討されていない。そこで本論文では、上記の研究目的を完遂すべく、計8カ月間の現地調査および文献調査にもとづいて、一次資料・文献資料を収集した。

続く第2章では、調査地であるオラド後旗およびMガチャーについて概観した。具体的には、オラド後旗の行政の歴史的沿革を整理し、オラドは部族名称としての意味合いが薄れて地域名として定着していることを指摘した。次に、漢民族が行政末端であるガチャーレベルでも多数を占めるようになり、牧畜の担い手にも漢民族が加わるようになった社会的背景を分析した。その上で、オラド後旗の自然条件および牧畜の形態を概観し、その特徴を浮かび上がらせ、中華人民共和国が成立してから現在に至るまでの牧畜政策の影響を指摘した。さらに、モンゴル民族と漢民族が混住するMガチャーの自然環境、牧畜形態や牧草地の在り方について詳述した。

第3章では、漢民族の牧畜活動の実態について、家畜管理技術を中心に記述し、モンゴル民族の家畜管理技術との比較を通じて、その特徴を論じた。まず、人民公社の牧夫であった漢民族が、人民公社が解体され、集団の所有であった家畜が社員に払い下げられることにより家畜を所有するようになった経緯と、現在使用している牧草地の面積および家畜頭数を示した。次に、新聞記事などのメディアにおいて、牧畜に転じた漢民族に関する表象の変化が見られることを明らかにした。そして、漢民族の牧畜活動の1年間のサイクル、家畜の個体認識、具体的な管理方法について記述した。最後に、モンゴル民族の家畜管理技術と比較して、漢民族の牧畜活動は生業的性格が強く、文化的性格が欠如していること

を指摘した。

第4章は、内モンゴルという個別社会の文脈におけるローカルタームとしての牧畜民/非牧畜民〔モンゴル語：マルチン (malcin) /マルチン・ビシ (malcin-bisi)、漢語：牧民 (mumin) /非牧民 (feimumin)〕の境界を決定している要因について考察したものである。具体的には、まず、牧畜を継続しているモンゴル民族と漢民族、牧畜をやめたモンゴル民族と漢民族というように、牧畜と民族を四象限に分け、漢民族の個々人の生活略史に即して、オラド地域へ移住した経緯、牧畜技術を身につけた過程、および牧畜民意識の形成について記述した。そして、漢民族の牧畜民という自己同定がモンゴル民族側から拒絶され、非牧畜民と見なされ、「マルラダグ、ヒヤタト (malladay kitad) = 牧畜に従事する漢民族」という、牧畜を行う漢民族の出現によって生み出された新しいモンゴル語の用語によって、下位に序列化されていることを指摘し、自己レベルと社会的承認レベルにおけるズレが生じていることを明らかにした。最後に、ローカルタームとしての牧畜民/非牧畜民の境界を決定している要因として、漢民族の牧畜活動にモンゴル民族が持つ牧畜文化的側面が欠如していることを指摘した。

第5章では、モンゴル民族と漢民族の関係を通婚、年中行事、擬制的親族関係に着目して検討した。通婚に関しては、個人の語りの分析を通じて、家畜管理における相互扶助関係により生まれた地縁的な連帯関係が両民族間の通婚を促していることを指摘した。そして、「退牧還草」政策に直面した際、通婚パターンによって牧畜をめぐる異なる選択をしていることを明らかにした。さらに年中行事と擬制的親族関係を分析し、両民族間の対立と相互扶助という相反する要素を含む関係について述べた。まず年中行事では、「中元節 (旧暦 7 月 15 日)」と「中秋節 (旧暦 8 月 15 日)」に漢民族のモンゴル民族への対立意識が見られることを指摘した。次に擬制的親族関係では、漢民族の「乾爹」とモンゴル民族からの養子についての事例を取り上げ、両民族間の助け合う関係を示した。こうした分析を通して、両民族間の関係が対立かそれとも融合かという二元論的な構造では捉えきれないことを指摘した。

第6章の結論では、各章の内容をまとめた上で、序論で提示した問題意識に対して次の2つの点から考察を行った。第一に、漢民族の牧畜活動の特徴をまとめ、モンゴル牧畜文化の枠組で捉えきれない漢民族の牧畜活動の在り方を提示した。既存の内モンゴル研究における民族と生業の結びつき、すなわち「モンゴル民族=牧畜民」、「漢民族=農耕民」という固定的イメージを相対化し、先行研究の問題点を乗り越えて内モンゴル牧畜社会の多様性に関する考察を進めた。第二に、牧畜という生業に着目した民族間関係の分析から、両民族のあいだに相反するベクトルを内包する関係が見られることを明らかにした。こうした相反する要素を含んだ共存・共生関係は文化人類学的視点から見た「中華民族多元一体論」に関する研究に対して、中国の民族間関係をめぐる状況は決して単純な漢化とはならないことを示すとともに、文化的差異を維持しつつ、生業を共有することによって共存・共生関係が生み出されていることを指摘した。つまり、上から民族間関係を調整するのではなく、地域社会が自己調整的に生み出した経験知としての共存・共生関係の実態を重視すべきなのである。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 白福英

Title
論文題目 中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究
—モンゴル民族との関係の視点から

本論文は、中国内モンゴル自治区オラド後旗に移住した漢民族を対象に、彼らの牧畜活動の実態を民族誌的に描写したうえで、牧畜に従事することで生じたモンゴル民族との民族間関係を明らかにしたものである。

中国内モンゴル自治区における牧畜に関しては、これまでモンゴル民族を対象にその牧畜技術を明らかにした研究や牧畜から農耕への生業転換を漢化として捉えた研究が多く蓄積されてきた。これに対して、牧畜を新たに始めた漢民族を取りあげ、その生業実態を詳細に描きだした研究はなく、かつ漢民族が牧畜に転じたことで生じた民族間関係を検討したものもなかった。そこで申請者の白は、中華人民共和国成立後の自然災害と大躍進政策による飢餓をきっかけに甘粛省から移住してきた漢民族に注目し、長期間のフィールドワークを通して彼らの牧畜技術の実態と民族間関係を明らかにした。

本論文は全6章からなる。第1章では中国における先行の牧畜研究を整理し、漢民族による牧畜活動や民族間関係の実態解明が遅れていることを論証したうえで、漢民族の牧畜研究を通して内モンゴル牧畜社会の多様性を捉えることの重要性が説かれる。第2章ではオラド後旗の自然環境および国家政策の変遷をまとめ、当該地域に漢民族が流入し、モンゴル民族と混在するようになった要因を明らかにした。第3章では漢民族の牧畜活動について五畜（ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダ）の管理技術を中心に記録したうえで、モンゴル民族の技術との比較を通して農耕道具の利用やタブーの軽視といった漢民族による牧畜技術の特徴を導きだした。

第4章では両民族の牧畜民を対象とした生活史や牧畜民意識の聞き取り調査を踏まえ、漢民族の牧畜民がモンゴル民族から「牧畜民」ではなく「牧畜に従事する漢民族」という独自の Kategorie で捉えられている事実を明らかにし、漢民族の牧畜における文化的要素の欠如が新たな Kategorie 形成の要因であると指摘した。第5章では、両民族の関係を通婚や擬制的親族関係などから分析し、家畜管理の相互扶助で生じた地縁関係が両民族間の通婚を促していること、養子をめぐり両民族に助け合いの関係があることが示された。第6章では、各章の成果を踏まえ、漢民族の牧畜活動を5つの特徴から明らかにするとともに、両民族間の関係がたんに対立か融合かという二元論で捉えきれないと結論づけた。

このような本論文には以下のように優れた点が大きく3つある。

中国・内モンゴル地域を対象にした牧畜研究では、牧畜地域へ移住した漢民族の牧畜活動に関わる民族誌の蓄積はなかった。こうしたなか、本論文は新たに開始された漢民族の牧畜に着目し、ラクダ飼育を中心とした生業の技術から牧畜民意識までを民族誌的に広い視野をもって明らかにした点に新規性がある。なかでも、牧地の分配状況を示した地図な

ど先行研究では言及されていない詳細な土地利用情報を分析に使用した点が特筆に値する。

また、本論文は参与観察や聞き取り、文献調査を通して1950年代以降の自然災害や大躍進政策、集団化に伴う移民の発生や牧畜の展開をまず復元し、そのうえで家畜に対する儀礼やタブー、民俗分類があまりみられないという漢民族の牧畜活動の特徴をモンゴル民族の技術との対比から初めて明らかにした点も高く評価できる。

さらに、本論文では両民族間の通婚や擬制的親族関係、年中行事を調査し、オラド後旗の両民族はお互いの文化的差異を維持しつつも対立と相互扶助という相反する要素を含んだ形で共存している実態を明らかにした。この成果は、少数民族の漢化に研究の力点を置きがちな中華民族多元一体論の議論に新たな事例と視座を提供するものである。

一方、本論文には問題点もある。第一に漢民族および漢民族文化について一元的に捉えがちであり、内部に存在する多様性や多層性の分析に課題が残る点、第二にモンゴル民族と漢民族の牧畜技術に違いが生じる理由について十分に考察されていない点である。

ただ、こうした点はいずれも今後研究をさらに掘り下げていくための課題であり、本論文の意義を損なうものではない。以上、本論文はこれまで十分な調査と解釈が進んでこなかった漢民族の牧畜を取りあげ、技術の詳細と両民族の関係を明らかにしたものであり、他民族との共存のありようや異なる民族が混住する社会のあり方を論じた地域研究の成果として、博士の学位を授与するに値すると審査委員全員一致で判断した。